

就学児童がいる女性の就労と学童保育

森田陽子, 坂本和靖

要約

本研究では「小1の壁」における学童保育の役割を分析する。分析の目的は就学児童がいる世帯の学童保育の利用実態を明らかにし、就学児童がいる女性の就労に対して学童保育がどのような影響を与えているのか、学童保育の利用者にどのような特徴があるのかについて明らかにすることである。分析には、厚生労働省「21世紀成年者縦断調査」(2002～2011年分)を用い、長子が小学生の女性における就業継続、就業決定、学童保育の利用者の要因について、パネル・プロビット分析をおこなった。

本稿の分析から以下の結果を得た。長子が小学校低学年である世帯における学童保育利用率は20.0%であり、母親が就業している世帯ほど、また生活時間を市場労働に配分している世帯ほど、家庭外保育としての学童保育の利用率が高いこと、学童保育が利用しやすい地域に居住しているほど母親の就業、就業継続が促進されていること、また、父親の協力が得やすくかつ学童保育が利用できることが母親の労働供給にプラスの影響を与えていること、学童保育の利用者の特徴として、母親が時間利用に柔軟性が確保できるものほど、父親の年収が高いものほど、夫の母親と同居しているものほど学童保育を利用しないこと、地域の学童保育が充実しているほど学童保育を利用していることが明らかとなった。学童保育の量的・質的な拡充が今後も求められる。